

特定非営利活動法人 子どもの虐待防止ネットワーク・あいち

News Letter

Vol. 16

2001.1.30

キャプナ ニュースレター

発行: 子どもの虐待防止ネットワーク・あいち 〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-4-4-404 TEL 052(232)2880 FAX 052(232)2882

CAPNA に朝日社会福祉賞！

CAPNAが、2000年度の朝日社会福祉賞（副賞200万円）をいただけることになりました。1月31日に朝日新聞東京本社で授賞式があり、祖父江文宏理事長、岩城正光副理事長ら中心メンバーが出席します。ことしの受賞は、団体がCAPNA、個人は伊東雋祐（いとう・しゅんすけ）さん（73）＝全国手話通訳問題研究会運営委員長。団体受賞は史上6番目という大変な栄誉です。

弁護団チーム（総勢61人）と連携した危機介入の活動、地道な電話相談事業、時代に先駆けた虐待死研究と出版の事

業などが評価されました。これまでCAPNAを支えていただいた皆様方に心より感謝申し上げます。

今回の受賞により、私たちはいっそう重い責任を背負うこととなります。これからも時代を切り開く活動を続けていきます。



あいち大会特集④～⑪面

「防げなかった死」に 大きな反響



CAPNAは、過去5年間の虐待死事件の調査や行政の取り組みなどをまとめた「防げなかった死—虐待データブック2001」（発行：キャプナ出版、発売：ほんの森出版）を、昨年12月1日に出版しました。

第1章は、1995年から99年にかけての464件に及ぶ虐待死事件の分析。第2章は、成人が被害者となった家族間の殺人・傷害致死事件の調査結果。介護殺人、障害者殺人などの問題にも切り込んでいます。第3章は各都道府県の取り組み。前回の「見えなかった死」（98年）からわずか2年で行政の取り組みが大きく前進していることを感じます。

このほか、CAPNA関係者のレポート、論文、子どもの虐待死事件の全データなど、情報がぎっしりです。

あいち大会では、約700冊を買っていただ

きました。その後も、多くのマスメディアで取り上げられるなどして注文が相次いでいます。

この本の収益は、すべてCAPNAの活動にあてられます。1冊2000円（本体価格、直販の場合は、消費税分はサービス）ですが、会員の方には1冊1600円で直販しております。10冊単位で、委託販売していただける場合は、送料は当方負担でお送りしています。

自信を持ってお勧めできる内容です。一人でも多くの方に読んでいただきたい本ですので、ぜひ、皆様の周りの方にPRしていただければと思います。詳しくは、事務局＝052(232)2880＝へお問い合わせください。

購入方法

<事務所で直接購入する場合>

一般 1冊 2000円

会員 1冊 1600円

<電話、ファックス、郵便で事務局に申し込み、取り寄せる場合>

上記価格に送料分を加算（1冊160円、2冊210円、3冊370円、4冊420円、5冊以上無料。

支払いは郵便振込（口座番号 00880-2-102543）でお願いします。

※委託販売も行っております。その場合、1冊につき単価1600円で委託させていただきます。10冊単位でお申し込みください。

ダイジェスト解説

私たちが「見えなかった死」を出版した当時は子どもが虐待で死亡しても、それらを「虐待死」ととらえ、分析する発想はありませんでした。彼らの死の意味は誰にも問われることなく、まさに「見えなかった死」だったのです。あれから2年、虐待をめぐる状況は大きく変化し、厚生省や警察が子どもの「虐待死」の調査に乗り出すようになりました。世間の関心も高まっています。このような動きのなか、虐待死事件にはどのような変化が生じているのでしょうか。

再び私たちが見出した事実を、それが意味するものを、ダイジェスト版でお伝えします。

(前回のニューズレターで調査結果をお伝えしましたが、その後出版に向けチェックを重ね、最終的に数値の訂正を行いました。ご了承ください。)

● 5年間で563人が死亡(表1)

毎年、平均100件の子どもの虐待死事件が生じている。95年は91人、96年は106人、97年は109人、98年は132人、99年は125人が死亡した。死亡数が最も多いのは無理心中で、全体件数の39.2%にあたる182件であった。

● ワースト3は愛知、東京、神奈川(表2)

前回の「見えなかった死」でも愛知県はワースト1であった。この数字はあくまで新聞で報道された事件の数であるため、必ずしも全ての事件を網羅しているとは限らない。しかし私たちは、CAPNAの地元である愛知県で過去5年間に42件もの虐待死事件が生じた事実を真摯に受け止めなければならない。

● 犠牲は1～5歳に集中(表3)

最も多いのは新生児82人、次いで乳児75人である。注目すべきは、虐待の種類別に死亡年齢に違いが生じている点である。各年齢に見られる虐待の傾向をふまえ、虐待防止策を考えていくことが必要である。

● 加害者の特徴(表4、5)

加害者は母親、父親の順に多い。せっかん死の加害者は男性が多く、年齢は20代から30代前半までの若い層に集中している。ネグレクトの加害者は25歳以下の若い母親に多い。

表3 被害者の年齢と受けた虐待の種類

	せっかん			無理心中			ネグレクト			発作的殺人			その他			合計
	男	女	計	男	女	計	男	女	不明計	男	女	計	男	女	計	
新生児	1	2	3	2	3	5	22	21	18	8	7	15	0	0	0	82
乳児	4	8	12	10	13	23	11	6	1	18	13	8	21	3	0	75
1歳	8	8	16	11	13	24	9	5	0	14	8	3	8	2	4	88
2歳	7	13	20	7	12	19	3	2	0	2	2	4	0	0	0	48
3歳	10	14	24	12	11	23	0	0	0	0	1	0	1	0	0	48
4歳	6	8	14	12	10	22	0	1	0	1	2	0	2	0	0	38
5歳	8	3	11	15	11	26	0	1	0	1	0	1	1	0	0	40
6歳	6	7	13	7	11	18	1	0	0	1	1	0	1	0	0	36
7歳	1	2	3	4	8	12	0	0	0	0	2	8	0	0	0	20
8歳	0	1	1	6	8	14	0	0	0	0	0	1	1	0	0	16
9歳	0	1	1	9	4	13	0	0	0	0	1	0	1	0	0	15
10歳	1	0	1	10	3	13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13
11歳以上	1	0	1	25	18	43	0	1	0	1	7	3	10	1	2	60
不明	0	0	0	2	0	2	0	0	1	7	1	0	3	0	0	10
計	50	62	112	134	124	258	44	37	24	108	81	27	66	8	9	563

表4 加害者の続柄

	せっかん	無理心中	ネグレクト	発作的殺人	その他	計(人数)
母	48	134	50	52	7	265
父	55	89	19	12	3	144
祖母	3	0	0	1	0	10
祖父	1	1	0	0	0	3
母の同居人	34	0	2	3	1	40
父の同居人	2	0	0	0	0	2
その他	5	3	1	1	1	11
不明	0	2	35	0	0	37
計	146	205	102	89	12	535

表1 虐待死件数と死亡した子どもの数の推移

	せっかん	無理心中	ネグレクト	発作的殺人	その他	計(人数)
95年	23(23)	25(35)	11(25)	6(7)	1(1)	86(91)
96年	23(23)	34(45)	15(18)	19(19)	1(1)	92(106)
97年	23(25)	31(44)	21(21)	17(18)	1(1)	95(109)
98年	32(32)	48(72)	12(13)	11(11)	3(4)	106(132)
99年	16(16)	44(62)	31(32)	12(13)	2(2)	105(125)
計	119(119)	182(258)	90(109)	85(88)	8(9)	484(563)

表2 各都道府県の虐待死事件件数

	95年	96年	97年	98年	99年	計
愛知	3	13	5	10	11	42
東京	5	11	7	5	7	35
神奈川	4	6	9	8	8	35
大阪	8	4	6	12	4	33
埼玉	3	6	5	9	2	25
千葉	3	6	8	1	5	24
静岡	2	5	7	7	3	24
北海道	6	4	3	5	5	23
茨城	2	5	4	4	7	22
福岡	4	4	3	2	7	20
栃木	2	1	5	2	3	13
兵庫	2	3	2	2	3	12
群馬	1	1	3	2	2	9
岡山	0	2	3	2	2	9
三重	1	2	1	2	2	8
青森	2	0	2	0	3	7
宮城	2	0	3	2	0	7
山梨	1	1	3	0	2	7
長野	1	2	0	4	0	7
岐阜	0	2	1	2	2	7
山口	1	2	1	1	2	7
岩手	1	0	1	1	3	6
愛媛	1	1	0	3	1	6
熊本	1	1	1	1	2	6
沖縄	0	2	0	4	0	6
秋田	0	1	0	2	2	5
新潟	0	0	0	2	3	5
滋賀	2	0	0	2	1	5
京都	0	1	1	2	1	5
佐賀	2	0	1	1	1	5
長崎	1	0	1	1	2	5
福島	2	0	0	1	1	4
広島	0	1	0	0	3	4
鹿児島	1	1	0	1	1	4
山形	0	1	2	0	0	3
奈良	0	0	2	1	0	3
香川	0	0	2	1	0	3
大分	0	2	0	0	1	3
福井	1	0	0	1	0	2
和歌山	1	0	0	0	1	2
高知	0	1	1	0	0	2
宮崎	0	0	1	0	1	2
鳥取	0	0	0	0	1	1
島根	0	0	1	0	0	1
富山	0	0	0	0	0	0
石川	0	0	0	0	0	0
徳島	0	0	0	0	0	0
計	66	92	95	106	105	464

表5 加害者の年齢

	せっかん	無理心中	ネグレクト	発作的殺人	その他	計(人数)
～20歳	6	2	11	2	1	22
21～25歳	47	8	23	11	2	91
26～30歳	37	34	15	17	4	107
31～35歳	32	55	4	13	3	107
36～40歳	14	38	3	11	1	67
41～45歳	3	21	6	5	0	35
46～50歳	5	20	1	4	0	30
51～55歳	0	11	3	2	1	17
56～60歳	1	3	0	1	0	5
61～65歳	0	2	1	0	0	3
66～70歳	0	2	0	1	0	3
70歳～	0	0	0	0	0	0
不明	1	3	36	2	0	42
計	146	205	103	66	12	535

あいち大会を出発点として

大会長 祖父江 文宏



ありがとうございました。

全国からお越しくくださった皆様方はもとより、スタッフとして運営をしていただいた皆様に感謝を捧げます。

とはいえ、大会が新たな出発点であることを考えると、これからも尚ご苦勞をおかけすることになります。

どうか、CAPNAとのつながりを持ちつづけていただきたいと思います。

あいち大会は、これまでの子どもの虐待防止のための活動を行政の専門機関や専門施設、研究者としての専門家個人の努力に課し、無関心でありつづけることで成立してきた市民社会が無関心を捨ててこの問題の主体になって欲しいという願いから始まりました。

子どもの虐待防止は、行政の専門機関だけが担い得る問題ではなく、まして個人の専門領域に留まる問題でもなく、市民が担うべき問題だと考えたからなのです。

子どもの虐待防止を市民が担うとは、傍観者としての立場を捨て、任せることで作りあげてきた専門機関や専門家、専門施設等の専門性の内容を識り、それぞれへの批判の力を持つこと、それぞれを虐待防止のために機能させることです。

このこと以外に、これまで傍観者でありつづけた市民が、主体性を持ち、市民としての責任を取る事ができないからです。

成熟した市民社会のあり方と開かれた専門性を問いかけたのが、採択された宣言文だと言えます。

宣言文は、子どもの虐待防止に対するわたしたち市民の出発点です。

どうか、より積極的にCAPNAとのつながりを持ちつづけてください。

子どもの虐待防止あいち宣言

1999年度に全国の児童相談所が受理した子どもの虐待相談件数は1万件を超え、9年前の約10倍に達した。また、過去5年間に報道された子どもの虐待死は563人に及ぶ。

本年ようやく「児童虐待の防止等に関する法律」が成立・施行され、子どもの虐待の早期発見と迅速かつ適切な保護のため、関係機関と民間団体の連携強化その他国及び地方公共団体の子どもの虐待防止に必要な体制の整備に努める責務が法に明記された。それは、本研究会を含め、子どもの虐待防止に関わる市民団体のネットワーク活動の成果が反映したものに他ならない。

この法の下、子どもを虐待から守り、子どもと親との心身の回復と成長を援助するネットワークをさらに全国各地に広げることが緊急の課題であり、国及び地方公共団体は、そのための実効性のある支援策を策定・実施すべきである。

他方、激増する虐待件数に対比して、児童相談所及び児童福祉施設等の人的・物的条件は余りにも遅れており、現場の職員が過重な負担を強いられている。また、虐待を受けた子どもの健康、自尊心、尊厳を育成する環境において心身の回復および社会復帰を促進することを求める子どもの権利条約39条の趣旨から余りにもかけ離れている。国及び地方公共団体は、児童相談所及び児童福祉施設等の専門スタッフ充実を含む関係機関のよりいっそうの整備を緊急に進めるべきである。また同時に、激増する虐待件数に対処するため、被害を受けた子ども自身やその発見者、加害者自身が安心して相談することができる24時間体制のホットラインを、市民団体との連携の下に早急に設置すべきである。

ここに、21世紀の子どもの未来をひらくネットワークを求め、第6回日本子どもの虐待防止研究会あいち大会において宣言する。

2000年12月8日

日本子どもの虐待防止研究会第6回学術集會長 祖父江 文 宏
日本子どもの虐待防止研究会(JaSPCAN) 会長 小 林 登



特別講演で、虐待のもたらす心の傷を語る
大平光代さん

■学術集会■

学術集会の参加者は3000人あまり。市民集会の参加者やボランティアを含めると、参加者は実に5000人近くという規模になりました。もちろんJaSPCAN（日本子どもの虐待防止研究会）始まって以来の規模です。しかし問題は中身。関係者の目にあいち大会はどう映ったのでしょうか？

児相は何をすべきか

東京都児童相談センター虐待対策課長 芦田真吾
あいち大会では、一般演題の発表、分科会助言者、自主シンポのシンポジストと目一杯参加させていただきました。また、研究者の方や施設職員の方、民間機関・マスコミの方などとの交流や意見交換の機会もあり、児童相談所に対する激励と暖かい批判もたくさんいただきました。特に、児相と民間機関との連携については、児相自身が変革していくためにも、さらに多方面での連携の必要性を強く感じたところです。

また、虐待対策課は児相が強制的介入機能の強化を図るために全国で初めて試行的に作った組織ということで、様々な質問を受け、関心の高さを実感しました。大会後に起こった虐待死事件における児相の対応をみても、児相の機能や役割が未だに未整備なことを改めて思い知らされました。限られた権限と体制の中で、子どもを救うために今、児相は何をしなければいいのか自問自答しています。最後にこれだけの規模の、しかも内容の濃い大会を円滑に実施されたCAPNAを始めとする関係者の皆様のご尽力に敬意を表します。私も日々の仕事に追いまわされる中で、皆様の熱意と元気を分けてもらった気がします。

あいち大会に参加して

こどもの虐待防止ネットワーク広島 中田憲悟
私は、初日のオープニングから二日目午後の分科会終了まで参加しました。

まず、何よりも驚いたことは、参加者の多さとボランティアスタッフの充実ぶり、そして市民集会を併行して開催されたことでした。会場の構造が複雑で、大混雑だったにもかかわらず、スタッフの方々と気持ちよく挨拶を交わし、道案内をしてもらいました。二日

間本当に快適に日程を終えることができました。

さて、私の参加した分科会（演題）は、①「児童福祉施設をひらく・つなげる」、②「虐待防止ホットラインの開設と運営」、③「弁護士活動が生んだネットワークパワー」、④「ドメスティック・バイオレンスと子ども」でした。

①「児童福祉施設をひらく・つなげる」では、児童養護施設・乳児院は生活施設と位置付けられているため、ケアのための専門スタッフが配置されていないこと、児童養護施設は児童相談所以外の機関とのネットワークができていないこと、施設の最低基準の抜本的改正が必要であること、親元に帰すことが最終的な目標ではなく専門的な里親を育成する必要があること、入所児童に関する情報不足等々の問題点が指摘され、そのほとんどがもっともな問題点であり、改善の必要性を痛感させられました。もっとも、広島の場合、未だボランティア組織の力は弱く、速やかにこれらの問題に着手できないのが現状であり、暗澹たる気持ちになりました。

②「虐待防止ホットラインの開設と運営」は、広島でも来年9月ころにはホットラインを開設しようという思いがあったことから参加しました。そこでは、特に専門相談員の育成、場所の確保という難しい問題を避けて通れないという現実を突きつけられました。特に、ホットライン設置時のコストは何とかなくても、設置後の賃料等ランニングコストは到底捻出できそうにないということです。やはり虐待撲滅運動を展開する中で、公的な場所の貸与等を検討しなければならぬようです。

③「弁護士活動が生んだネットワークパワー」は、私も弁護士であり非常に興味がありました。演題にしては、余りにも広い会場であったため、余裕のある空間でリラックスして参加できました。その中では、児童相談所の代理人として28条の申立て等をするだけでなく、被虐待児の代理人として少年の附添人や刑事告訴等も、また、虐待した親の代理人として刑事弁護人や破産申立て・任意整理までされているということは、本当に参考になりました。広島でも早速弁護士を結成しようと思っています。スタートは、7、8名になりそうですが。

④「ドメスティック・バイオレンスと子ども」というテーマも弁護士として、離婚や自己破産の事件に関与していて常に苦悩させられる問題です。暴力を振るう夫から母子を早期に分離し物心両面から援助しなければならない、そして、離婚・親権者の決定という法律的な問題を解決しなければなりません。早くも暴力を振るう父親のケアも必要ではないかとの見解を述べる方もおられますが、まず、母子に対する金銭的・心理的な面でのケアをしながら、父親から事実上・法律上分離することが先決だと思っています。

以上私が事務局を努める広島のネットワークも歩き始めたばかりで、子どもを取り巻く問題の多さ、大きさに押しつぶされそうになりながらのあいち大会参加

でした。ずっしりと重たいプレッシャーを感じつつ、声が出なくなってしまうのではないかと思うほど大変そうだった岩城弁護士や大会運営スタッフの皆さんの生き生きとした姿勢に勇気付けられて名古屋を後にしました。

保育園・幼稚園での虐待対応の課題

白石 淑江

分科会「保育園・幼稚園での初期対応を考える」で感じたことを、二点報告したい。

第一は、分科会参加者約180名の中に、幼稚園関係者が一人もいなかったということがある。これは、幼稚園関係者の関心が薄いということもあるが、むしろ、幼稚園とのネットワークづくりが遅れていることを物語っていると思う。企画者の一人としては、幼稚園関係者への呼びかけが不十分であったことが反省させられた。あいち大会の直前に報じられた広島県内の兄妹虐待死事件では、犠牲となった兄妹が二人とも幼稚園に通っていた。幼稚園は保育園と同様に、虐待防止に寄与できる場である。今後は、教育委員会を含めた幼稚園とのネットワークづくりを積極的に進めていかなければならないと痛感した。

第二は、大阪の取り組みから学ぼうということである。例えば、一般演題で報告のあった、厚生省科学研究の調査結果（下泉秀夫）によれば、虐待の可能性があると判断した保育園のうち、それを「役所の担当課」「児童相談所」「福祉事務所」などに「連絡した」割合は、大阪が46%と際立って多かった。この調査は愛知県では実施されていなかったが、もし実施していたらこれほどの値が得られるであろうか。

また、東大阪市では、保育研究室が実施している障害児の巡回指導の際に、「被虐待児もしくはその疑いがあるケース」を含めて対応していることが報告された。指導保育士と心理職員が各2名配置されており、2班に分かれて、公立、私立の各保育園を定期的に巡回しているそうである。保育園は、現場で子どもを見てもらい、児童相談所や福祉事務所に相談・通告すべきかどうか、子どもや保護者にどう対応したらよいかなど、実践的なアドバイスを得ることができる。今後は、このようなサポートシステムを愛知県でも整備する必要があると思った。

NPO法人の原点を大切に

矢満田 篤 二

昨年までの全国大会の流れがさまざまな構想と合流して、大河になったというのが実感です。特に、市民の主体性を正面に掲げたことは、CAPNAがNPO法人であることと表裏一体であり、画期的な編成だったと高く評価しています。

私は、二つの新しい企画を持ち込み、実現させていただきました。一つは、里親関係の分科会を初めて開



スタッフ全員が壇上にそろった閉会式

設した。もう一つは、意見広告を掲載したことです。どちらも市民レベルの視点を大切に企画のつもりでした。でも、本流に入れるような清流水ではなく、泥沼になるのではないかと心配をかけたようです。

里親分科会の企画原稿には、ソフトな表現に改めるようにと手が入りました。意見広告では、個人的には反対だと言われたりしました。その是非については、今後の流れで見極めたいと考えています。多様な意見が論議され、試行錯誤しながら状況を改善していく過程を保障しないと、石橋を叩く官僚制度の批判などできません。失敗の危険度をどの範囲まで許容するのか、行政でも企業でもない第三セクターとして存在するNPO法人こそ、そのハードルを下げるべきではないでしょうか。

感情に左右されないで検討を積み重ねること。頑固とか保守的といわれる高齢世代に属して、自戒しています。

12月8日・9日はこうして決まった

総務担当 兼田 智彦

1997年12月、横浜大会で2,000年に愛知での大会開催が要請された。とにかく日程と会場をおさえないといけないという気持ちで、以前お世話になったことのあるJTBイベント&コンベンションに連絡した。

開催日程をどうするかは重要な問題だ、名古屋の夏はくそ暑いし、秋は学会や研究会が多すぎる。かといって4月5月は年度始めて難しい。一番よさそうなのが横浜と同じ12月だ。では何日にしようか。まず自分が参加しやすい日、市民のみなさんが参加しやすい日、それはやっぱり金・土だ。こうして決まった12月8日、くしくも日本にとっては20世紀の汚点、太平洋戦争開戦の日、さらに、ビートルズのジョン・レノンの命日、いずれ歴史の教科書には12月8日は「日本における虐待防止の日」として書き加えられるものと確信しています。

大切な命綱だあぎやー

岩 城 正 光

みなさん、尾張名古屋へ、よう、いりやあした、なも。

学術集会3100名、市民集会1300名、ボランティア200名という。どえりあ、ぎょうさんの人が、あいち大会(ていやあ きやあ)に集まってもらって、ものえりえ、うれしいで、かんわー。なによりも、わたしらCAPNAの、ぬくといい心が、参加者全員にこれからもずっと、いい思い出として、伝わっていくとええなあと、思つとるがねー。

お偉あ先生も、みんな、大会中ずっと「さん」付けでよびあつとるうちに、市民と同じ目線の高さで虐待防止の思いを共通にしていけると信じとったわけー。

ほら、みやあーせ、大会の反省会を12月25日に開いたんだが、なんとその場で行政やCAPNAが今後も連携していくために「あいち子どもの虐待防止研究会」を作ろうということになってきたんだわー。ほら、みてみい、児童相談所もCAPNAもみんなちゃんと手をつないどるがねえ。せつかくつないだ手なんだから、ぜえったあ離したらいかんでよー。この手は子どもの生命を守る大切な命綱だあぎやー。虐待する親をケアする連帯だあぎやー。ほんと、この大会にかかわることができて、わしもひとつ大きくなった気がするんだわー。大勢のボランティアのみなさん、ありがとね。これからもCAPNAを応援したってちよー。

ありがとう、ござあました。

■市民集会■

この大会で、私たちがこだわったことは「市民主体」というメッセージでした。大学などの公的機関が事務局を務め、専門家が集まって討議するだけの大会では「子どもの虐待防止」は果たせないと思っていました。大平光代さんの特別講演は1,000人近くの一般市民を集め、地元の市民団体の展示、自主企画も盛況でした。朗読劇・和太鼓・映画・合唱などのステージもありました。

心と体が響きあつて

尾 崎 仁 美

「お急ぎとは思いますが、少年たちのはぐるま太鼓を聴いてやってください!!」「すぐに帰られても結構です。ひと肌でも触れてやって下さい!!」風邪気味のかすれた声で叫ぶ私の声に、足を止められてセンチューリーホールへと入っていく人々の暖かさ。我が子の演奏を聴いてほしいの一念での廊下を通せんぼしてのお勧めに、遠くから来ていた人も「少しだけ」とホールの中に消え「背中に鳥肌が立ちました。感動しました。」と言って帰られた。

12月9日大会フィナーレを飾った“はぐるま太鼓”。心からの願いが相手の心に響いてこそ、子どもの幸せを守っていけるのだと、妙に納得し充実した呼び込み劇でした。

市民集会参加者は展示会場撤収でテンテコマイ・・・はぐるま太鼓第一部は、閑散とした会場が始まっていた。『これではいけない。少年たちは一生懸命演じている。研究・発表だけじゃないぞ。この“はぐるま太鼓”が成功してこそ本当の虐待防止大会なんだ』で始まった呼び込み。正面玄関では、板倉さん野村さんが大奮闘中。私はセンチューリーホール横の2号館連絡通路へと飛んだ。「私は、分科会会場前へ行くね」と走って行った白石さん。

ホールをのぞいてびっくりした。大勢の人人…太鼓



本の販売に励むCAPNAのメンバー

の響きと共に泣けてきた。ポロポロ泣いている私の頭を抱いて泣かせてくれた榎本さん。

思いを寄せて、つながりあつていく心のバリアフリーを味わった大会でした。

センチューリーホールを担当して

上 野 美 子

緞帳は空いたまま真っ暗な舞台、そこに胎児の心音が響きわたる。一瞬の空白、鋭い産声と共に子どもたちの笑顔がホリゾンに写る。ピンスポットが落ち、祖父江実行委員長の学術集会、市民集会の開会宣言が始まった。「私たちは、自分のために良かれと20世紀を生きてきました。だから、私たちが常に見失ってきたのは、小さい人、あなた達でした。だから今、21世紀への重い扉をせめてこの言葉を持って開きます。小さい人よ、あなたの笑顔のために生きよう」と。センチューリーホール3000の席に満員のお客様をお迎えしてのオープニングのメッセージだった。胸に熱いものがこみ上げてきた。

前日の7日は午後から舞台の「仕込み」が始まり。夕方、設立当初からメンバーの阿部陽子アナウンサー

■特集・あいち大会

が東京から駆けつけてくださり、オープニングのリハーサルと全体の打ち合わせ、そして、朗読劇の舞台稽古が始まった。出演者は忙しい弁護士さん、遠くから来た電話相談スタッフ、CAPNAのメンバーや、この朗読劇の初演を見て、次回は是非出演したいと祖父江さんに手紙を書いて参加した、一番小さな出演者の小学生の堀井結梨香さんだ。終わったのは10時近かった。阿部さんは司会のシナリオを作るためCAPNAの事務所に戻り、パソコンに向かった。阿部さんをホテルに送って行ったのは11時を過ぎていた。

オープニングは時間を少しオーバーした。つぎの講演の大平さんは「時間どおりに終わりますから」とにっこり笑って言うてくださった。「ありがとうございます」と感謝の気持ちでいっぱいだった。その後プログラムは順調に進んでいった。

和太鼓「はぐるま」のメンバーが演奏を終え、トラックに道具を丁寧に積み込み福井に帰って行くのを、皆で見送った。2日間を無事に終えることができたのは、私と一緒にセンチュリーホールを駆けまわってくれたゾンタクラブの皆さんのおかげだった。教えていただいたこともたくさんあり、やさしい心配りの方たちだった。2日間ありがとうございました。

ステージの上で…

加藤悦子

舞台袖からは、一人ひとりの顔が、見えていた。「何が始まるのだろう」との期待が、伝わってきた。

あいち大会オープニングのプログラム、朗読劇「舞う雪にさっちゃんの歌がきこえる」。会場のセンチュリーホールはいっぱいの人で埋め尽くされていた。

この劇は、実際に生じた事件をもとにつくられている。

一人の女性が、幸せになろうと思い、思いつめ、追い込まれていく。

支え手の女性が、自分の過去に出会い、心を惑わし、相談者に支えられていく。

善良だけど無神経な人たち。木枯らし、舞う雪、人として生きる哀しみと強さ。

あいち大会の2日間、全国から集った私たちは、虐待がもたらす哀しみ、痛みについて語り合った。それらを克服しようとして、さまざまな立場の人が、自分たちにできることを模索し、結びついていった。私はそこに、強さを見た。

劇で、私は次のようなセリフを言った。「そう、あなたは一人じゃない。」このメッセージは、あいち大会に参加した方々の胸に届いたのだろうか。苦しんでいる人に、届いたのだろうか。

展示ブースでがんばりました

村橋恭代

2000年あいち大会、皆様本当にお疲れ様でした。今回、市民集会の「CAPNA電話スタッフの展示」と

いう部分で、大会に関わらせていただきましたが、市民の虐待防止に対する関心が、日々高まってきているという事を肌で感じ、CAPNAの意味も大きく、またこれから一般の市民の中に定着させるべき「虐待防止の意識」を少しずつでも広げていかなくてはならないと痛感した大会でした。

そのために、電話スタッフとして何ができるのか、また市民への啓発活動も今後考えていきたいと思っています。

電話スタッフの展示物作成は、アイディアを出すために、無い知恵を絞り、またパソコンとの戦いの日々でしたが、できあがった時の充実感は、ひとしおでした。

今年もまた、できることを精一杯やっていきたいと考えているところです。

子どもたちの笑顔のために

名古屋市立大学大学院芸術工学研究科 坂戸 尚子さん

展示会場はクリスマスのイメージでと言われた時

に、巨大なツリーを見上げる子どもたちの笑顔が心に浮かびました。両手いっぱいのプレゼントの箱、天井からツリーへと向かう赤い布、ツリーの先端を彩る大きな星、子どもたちの写真を照らす灯りのオブジェ。いつまでも子どもたちが天使のように笑っている世の中であって欲しいという願いを込めて、会場準備をしました。最後に、このような機会を与えて下さったことを感謝します。



防災スプレーを探して…

市民集会長 安藤明夫

クリスマスツリーを包み込むように、全長50mの赤い布で会場にリボンをかけたい。

デザイン担当・坂戸さんの素敵なアイデアに対し、ホールの担当者は「消防法の関係で、防災加工をしないと認められません」。さて、困った。

防災スプレーなるものがあると聞き、名古屋市内のホームセンター、カーテン店、クリーニング店などを軒並み電話した。どこにもない。時間は刻々と迫る。前日の朝、同僚の野村記者の粘り強い取材によって、東京のメーカーに在庫があることが分かった。

さっそく電話すると「そんな小口は受けられない

けれど、こちらに来ていただければ試供品として差し上げます。

たまたま、別の同僚が東京に出張していて、運び役を引き受けてくれた。現物が届いたのは大会開幕の12時間前のことだった。あの赤いリボンの影に、記者たちの善意と努力があったことを、だれも知らない。

●●参加団体から●●

背高女プロジェクト名古屋・関西・沖縄 河合容子さん
大会2日目のランチタイムに、8人の背高女とサポーターとでパフォーマンスをしました。

背高女は文字通り背の高い(2.5m)女たち。視線を高く持ち、嵩高くものをいう女たちです。「あらゆる形の暴力をなくそう」+「児童虐待防止法の見直しの準備を始めよう」と、呼びかけました。きちんと意見を発信することで、自信が湧きました。仲間は、背高女になると沢山の人が話し掛けてくれるので、いっぱい話し合えたと喜んでました。

SKIP 河内かをるさん

市民集会での展示に参加しました。多くの方の参加と国際会議場の広さに驚きでした。各ブースに出展している様々なグループの方々や学術会議に参加している方々ともコミュニケーションでき、とても有意義な時間がもてました。直接虐待とは関わりのないように感じられる子育て支援の役割も改めて必要性を感じました。

以前に比べると「子どもの虐待防止」に対して関心が高くなってきて、虐待に関心をもつ方が増えてきましたが、より多くの方々に参加していただき虐待の被害が少なくなることを願います。

愛知“人間と性”教育研究協議会 木全 和巳さん

このような研究会では、どうしても専門職の専門性ということが強調されがちです。今回、市民集会と学術集会と両方に参加する機会がもてました。学術集会の盛況もですが、市民集会の成功に大いに励まされました。この体験を通して、民主主義という理念を大切に作る社会を構成する一市民でありつづけることの基礎のうえに、はじめて専門職の専門性が成り立つのだということを改めて実感しました。虐待防止活動は市民が主体です。

ふりあん 江口このみさん

ふりあん交流会は、あいち子育てネットワーク誌『Kids' ばあく』をつくる過程で知り合った方々との、交流と情報交換の場です。今回の市民集会は、子育てマップを作成したグループが合同で参加しました。ひとりひとりの力に限界があったとしても、手を取り合えば解決の選択肢が増えるに違いない、たくさんの楽

場者と話しをしながらこんなことを感じました。大きな目的、「子どもたちの笑顔」へ、確実な一歩が踏み出せたと思います。

「出会おう！遊ぼう！輪になろう！～子育てサークルと市民の交流会・2000～」今井田 貴子さん

12月8日、国際会議場の展示室に、ベビーカーや子の手を引いて集まってくる親子連れ。レモンママのコンサートの始まる頃には、会場はほぼ満員に。「変身ごっこ」の衣装づくり、手遊びなどの「あそび」コーナーには、いつも楽しそうな親子の姿。壁際には、子育てサークルと支援団体がそれぞれこの日のために制作した、展示のコーナー。じゅうたんに座ってのテーマごとの井戸端会議では、もう少し時間がほしかったという声ができるほど、熱心に話し合いが進んでいました。一見、虐待という言葉とはかけ離れたかに見えたこの日の風景ですが、子育て中の親子が、タイトルのように、「出会う、遊んで、輪になる」ということの大切さを、改めて教えてくれていました。日頃の子育て支援事業をつうじて関わっている親子も来ていましたが、さわやかな笑顔が印象的でした。

この交流会は、名古屋市健康福祉局児童課との共催でした。市民集会の中で、「サークル交流会」を行いたいと提案があったのが、夏。その後、子育てを支援する6団体による、実行委員会が結成され、まめっこは事務局になりました。広報なごやに「市民200名を無料招待します」と紹介されると、応募はがきが殺到。「引越してきたばかりで友達がなかなかできません」「子どもは身体が弱いのであまり外出もできないので、楽しい1日をすごさせてあげたいので是非」「サークルを探しています」など、反響の大きさに、身が引き締まる思いでした。実行委員会のこの間の歩みは、平坦ではありませんでしたが、それぞれの得意分野を生かして力を発揮する形をとることができました。この交流会は、タイトルのように、市民である親子と、子育てを支援する人たちの、有意義な出会いの場となりました。これからが楽しみです。

医療と保健と福祉の市民ネットワーク 塚海 篠崎しげやすさん

子どもへの虐待のニュースが後を絶たない中おこなわれた市民集会には数多くの方が参加し、多様な交流がおこなわれました。出展する側はたんに子ども関係の団体だけではなく、高齢者関係の団体や、私たちのようにNPOのネットワークを作っている団体など様々な団体が日頃の活動を紹介しました。

子どもを取り囲む環境が複雑化・多様化・深刻化しているなかで、今私たち大人がやらなければならないことは、子どもが自分らしく成長できるための環境作りであると思います。そのためには多くの団体の幅広いネットワークが必要です。

今回の集会は、そのためのいいきっかけになったと思います。

■長い日々■

昨年夏以降のCAPNA事務局は、まさにてんでこ舞いでした。毎日のように新しい仕事为抓手が振りがかってきました。学会形式のイベント運営を経験しているスタッフはごく一部。スムーズにいかないことは山ほどありました。それでも、素人集団がやり遂げました。

共感を求めて

田島 淑子

ブルブルブルブル ビュルビュルビュル ビー
ヒョロービーヒョロー タンタンティンタターンタ
ラッタラッター この音どこ？どれなの？

4台の電話が競って鳴る。「もしもし」「モシモシ」
「もしもーし」

あっ 違った。こっちだ。

ビー「何のFAX? 申し込みはJTBだよオ」

ピンポン ピンポン「ヤマトさん? 紙が届いた!間に合った!!」

カシャーカシャー「あと何枚? 500枚刷ったら終わりだよ」

ゴツン 痛ッ ごめん。ガツン ウッ 痛え
またこの机にぶつかった。

「パソコン大丈夫だった?」

「ワッ 今何人いる? 20人? ふう 窓あけよう 酸欠だよ」

喧噪の中 ある人がポツリと言った。

「いつもは遠い事務局が近く感じられる」

「自分の中の事務局への扉がちょっぴり開いたそんな気がする」

そのひとこと 私の胸にズシンと響いた。

『あいち大会』の準備を進める中で、CAPNAの仲間同士の連帯 共感を実らせる事こそ 大切な意味があるのだと。

ルルル ルルル「はい CAPNA ホットラインです。」そして今日も受話器の向こうから、心を開きたいいのちをつなぎたい電話が鳴り続ける…共感を求めて!

善意の中で

山田 裕子

ボランティアの活動が生活の一部として、自然体で出来るようにと望み、「自分のできる範囲で出来ることをする」それが継続につながる秘訣なのではないかとの思いは、CAPNAの活動にかかわらせていただいて5年がたった今でも変わらない。

このあいち大会では、広報部会長と学術集会部門でのボランティアの仕事担当となった。当初、広報のタイミングや記者会見の流れ、ボランティアさんの配置や仕事の分担、通常の事務局での仕事などいろいろなのが頭に浮かび、眠れない夜もあった。時間的にも精神的にもゆとりが持てなかった。

皆さんの後ろから息を切らして走っていたのだが、持ち前のお気楽さで「何とかなるヨ」と考えることにした。仕事を進めていくうちにふと気づくと、人の心の温かさの中に見事にはまっている自分を発見した。

もちろん、ボランティアとして協力して下さった皆さま方の熱いハートの中にある。『山田さん、何でも言ってください。お手伝いしますよ』『この日ならば、もっと人を増やせますよ。何とかやりましょう』『当日ちゃんと行くからね、待ってってネ』このような善意の言葉が、くじけそうになる私を支えてくれた。

私の願いはただ一つ、ボランティアをして下さった方々に少しでも関わって良かったと思っただけのこと。大会までに、18のグループの代表(学術集会部門担当)の方々と、たった3回の打ち合わせ会を設けるのが精一杯で、あとは電話連絡のみが頼り。当日まで、一日あたり159名のボランティアさんと顔を合わせることは出来なかった。

そのような状況の中で、大会中、楽しく活動することができたのは、グループのリーダーさんを初め皆さまの強い責任感と、コツコツと細かい仕事に精を出し大会の準備をして下さった人達、ホテルに宿泊してまで一緒に仕事をして下さった人達、夜間にまで及ぶ仕事でも「ヨッシャ!」と付き合ってく下さった人達の熱意・・・etc. そんな、忘れることのできない善意のエネルギーのお陰であったと心から感謝している。



大会直前。準備に励むスタッフたち

「信じられない」

村岡 扶佐子

「ええ? うそー!信じられない!」
毎日、事務局に私の奇声がこだましておりました。事務局の皆様にはとてもご迷惑な雑音でした。

150人を超える講師の方々、60組の自主企画の方々との連絡調整では、予期せぬ事の連続でした。

例えば、抄録原稿の収集で、やっと電話で捕まえたA氏との会話。

村岡: 申し訳ありませんが、抄録原稿の提出期限が過ぎております。よろしくお願ひします。

A氏: え? 何の話?

村岡：(うっそー) 1ヵ月ほど前に文書で依頼致しましたが… (信じられない)

A氏：郵便？そんな大切ななくさないけど知らないな。今、もう一つ原稿抱えていて忙しいのよね。いまも、これから会議よ。

村岡：3日後の18日までに頂かないと抄録が白紙になってしまいます。申し訳ありませんが、よろしくお願い致します。

と、この様な強引な電話をした後、「信じられない！」と叫んでいました。

その2日後、原稿が届いた時にも、郵便物を開けながら「信じられない。あんな忙しい方が…！」

あいち大会は、お忙しい中、ほとんど無料奉仕の講師の方々自主企画参加の方々、一方の3000人を超える大会申し込み者の方々により作り上げられる大会と、実感する毎日でした。この様なみんなの取り組みが持続力となり、虐待を予防していく力になる事を望みます。

大会3日目が

岡 千 弘

名古屋国際会議場の2階正面入口から1階受付へと続く広いロビー全体に、晴れがましい生き活きとした空気がみなぎっていた。

さあ、あいち大会の開幕。前日と前々日に現場での準備作業にやってきた時とは打って変わり、会場がまるで生き物のように鼓動し始め、受付ロビーは全国からの大勢の参加者でみるみる一杯になった。迎える私たちスタッフの間にピーンと張りつめたものが走って、皆キリリッと締まったいい顔をしていた…。

その心地よい緊張感に満ちた会場風景が、未だに鮮烈なまま私の頭の隅に残っている。あの一大イベントを一市民団体の私たちが中心となって数々の苦難を乗り越え、無事やり終えたあとの大きな安堵感と、今も脳裏の一角を占めている鮮烈過ぎる余韻とが交錯して、現在なんだか妙な気分である。

大会の準備作業では、9月以降が特に多忙をきわめ、時間との闘いという様相を呈した。時間的な余裕がなくなっていくにつれて、「経過した時間は決して取り戻せない」という当たり前のことがプレッシャーともなり、準備すべき項目に漏れはなかったか、やり残した事項はなかったか、とその点検作業にも緊張を覚えたものだった。

そのせいか、実は私にとって今大会は3日目があったのである。2日間の大会を成功裡に終えたその夜、私は夢を見た。大会3日目に向けていろいろな手配に走り回り、漏れがないかチェックを重ねている私がそこにあった。

いつのまにかボランティア

隈元真理子

大会の前日、J a S P C A Nの会議がありました。

その時コピーの必要が生じたのですが、国際会議場はなんと世間相場の2倍という値段。「明日だったら本部で印刷できるのに」とつぶやくと、J a S P C A Nの事務局の方から「コピー機をレンタルされるのですか」とのお尋ね。「いえ、ある会社の好意です」と答えると「それはすごい！」

そうなんです。CAPNAが助成金で印刷機を購入して以来、R社にはあれやこれやと便宜をはかっていたいただいているのです。商談からはじまって、いつのまにかボランティアも、という会社はここだけではありません。これはやはりすごいことです。

こんなふうに分のできることを提供して下さる方々の支えがあって、あいち大会は運営されたのでした。

CAPNAとつき合ってもあんまり儲からないと思うけど、Sさん、Oさんこれからもよろしく。

ホンマに激しい大会でしたわ

水 戸 憲 一

準備期間中は「もうやめたるか！」という何度か思ったんやけど、「これを成功させな日本の虐待防止活動は変わらへんでえ」っていう気持ちで、取り組んだかいが、あったってもんですわ。(なぜか関西弁。来年は神戸やしね。)

ご苦労様でした

総務委員長 川上明彦

まさにスタッフ全員の情熱と結集に支えられた2000年大会でした。大成功でした。スタッフジャンパーを着た人々の顔の輝きと誇らしげな表情がとても印象的でした。

誇らしく スタッフジャンパー

舞い走る 小さき人よ 君らに未来を

私としては、5000名近い参加者の数にも安堵しました。そして、いくつかの企画で、何度も感激させられ、何度も目頭が熱くなりました。

皆さん、ほんとうにご苦労様でした。

クリスマス緊急シンポ

あいち大会が終わった直後の昨年12月11日、愛知県武豊町で、3歳の長女を餓死させたとして、会社員の父親(21)と、無職の母親(21)が半田署に逮捕され、殺人容疑で起訴されました。各新聞が大報道を展開し、関係機関の連携の悪さを問う声も高まったことから、CAPNAはクリスマスイブに名古屋市中区の県産業貿易館で緊急シンポを実施しました。

シンポジストは、日本福祉大の竹中哲夫教授と、CAPNAの祖父江文宏理事長、岩城正光副理事長、安藤明夫常務理事、高橋昌久理事。児童相談所のあり方、危機介入の課題、小児科医の意識、報道の課題など、さまざまな切り口から、虐待防止の現状を説明しました。児童福祉関係者、報道関係者、一般市民など200人近くが参加し、質問も活発でした。

子どもの虐待死事件をマスメディアが積極的に報道するようになったのは、社会啓発の効果も大きい反面、問題が単純化され、誤解が広がるなどして、関係者の熱意に水をかけてしまう恐れもあります。悲惨な、珍しい事件を大きく取り上げ、インサイドを報道していくのではなく、再発防止を旨として社会の構造に切り込んでいく報道を期待したいものです。

次回市民講座は2月22日

2月22日午後6時30分から、CAPNA市民講座を名古屋市中区の女性会館で行います。講師は、加藤悦子理事(日本福祉大学院博士課程)で、テーマは「虐待死事件から見えてきたこと」です。加藤理事は「防げなかった死—虐待データブック2001」の編集者の一人です。今回の調査、執筆を通じて感じた「暴力を生む孤立」の問題や、弱い人たちの命を救う方策などについて話します。参加費500円(会員無料)。

ぜひ、ご参加ください。

総会は5月20日・ウィルあいちで

本年度のCAPNAの総会は、5月20日に、名古屋市東区のウィルあいちで行います。時間や詳しい内容は、次号でご連絡します。

20世紀のCAPNAは、子どもたちを守るために全力で坂道を駆け登ってきました。これからのCAPNAは、より多くの人たちが緩やかな形でCAPNAにかかわっていける組織、県内の広い地域での虐待防止活動を応援できる組織になっていきたいと考えております。

ぜひ皆様のご意見をお聞かせください。

CAPNAニューズレター16号

編集人 祖父江 文宏
1部 200円

発行 特定非営利活動法人
子どもの虐待防止ネットワーク・あいち
〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-4-4-404
TEL 052(232)2880 FAX 052(232)2882



子どもを「かわいい」と思えない
カッとしてつい手を上げてしまう
虐待されている子が、近所にいる
虐待を受けた記憶に苦しんでいる
ぼくは(私は)虐待を受けている
育児に疲れた。私はダメな母親だ

CAPNAホットラインをご利用ください

052-232-0624

平日AM10～PM4研修を積んだスタッフが対応。
木曜日は東海市(0562-36-0624)でも受け付けます。